若年層に見る日本文化
Japanese culture found in the Young Generation

平　澤　洋　一

要旨：方言の分布や方言境界線については，『日本言語地図』をはじめさまざまな調査結果が報告されてきた。日本の方言区画には，東部方言，西部方言，九州方言，琉球方言，八丈方言の５大区画とする説などがあるが，若年層における現代の日本文化圏や文化境界線を明示した報告はなさそうである。本稿は主に東日本の若年層から得た第１次調査の結果をもとにした報告である。

キーワード：言語文化，現代文化圏，若年層，東日本

１　はじめに

日本文化の基層は９文化圏（１.アイヌ文化圏、２.ミズナラ帯文化圏、３.焼畑農業文化圏、４.餅なし正月文化圏、５.佐渡文化圏、６.照葉樹林文化圏、７.隼人文化圏、８.琉球文化圏、９.宮古・先島文化圏）に分けられる可能性のあることを指摘したことがある[(1)]が、３.焼畑農業文化圏および４.餅なし正月文化圏が独立した文化圏と認定すべきかどうかは、臨地調査ないしはWeb調査などのデータを踏まえた実証的な研究の成果を待つよりほかにない。

また、２.ミズナラ帯文化圏、３.焼畑農業文化圏、４.餅なし正月文化圏、そして６.照葉樹林文化圏は、予想される東日本文化圏、近畿文化圏、隠岐・出雲文化圏（＝仮称、中国地方の日本海側プラス九州の北部）と重なる部分が多そうだ。

その後の文献調査データなどをまとめた範囲内では、日本文化圏の深層[(3)]として８文化圏の存在した可能性が高そうだが、上記の８文化圏とは構成が異なり、(a)上古アイヌ文化圏、北海道縄文人文化圏、(b)縄文宮古諸島・先島諸島文化圏、(c)粟地帯としての関東縄人文化圏を中心とする縄文関東・東日本文化圏、(d)佐渡島文化圏・中黒 奄美大島・沖縄本島文化圏、(e)麦・粟地帯としての隼人文化圏<北部を除く九州文化圏>、(f)稲・麦・粟地帯としての九州北部および隠岐・雲伯を中心とする中国地方北部文化圏、(g)稲地帯としての近畿および瀬戸内を中心とする弥生文化圏、(h)八丈島文化圏という８文化圏である。

しかし、東日本および西日本の山間部における焼畑農業文化圏・餅なし正月文化圏の勢力範囲がどの程度残存しているかによって、さらに文化圏の修正を迫られることも予想される。文化圏を確定するには、全国的な文化圏調査が不可欠である。

2　予備調査の範囲

2010年に、第１次調査として主に東日本若年層を中心とする調査を実施した。調査時期は2010年６～９月、調査対象は若年層71名、調査方法は面接調査である。71名のうち63名は言語形成期が東日本（ただし青森県は話者を得られなかった）、８名が西日本（岐阜県、岡山県、広島県、佐賀県、長崎県２名、熊本県、沖縄県）であった。

今回の第１次調査は、先行研究[4]の報告の中から、できるだけ地域差・文化差のはっきりした項目を選定し、５分野24問とした（調査項目と調査の狙いについてはすでに報告済み[5]である）。

（１）自然文化圏：１周囲にはミズナラ帯が多いか照葉樹林帯が多いか。２今でも焼き畑農業の行われている所があるか。

（２）食文化圏：３お正月に餅を食べる習慣があるか。４どんな雑煮がお正月の伝統化か。５サトイモが儀礼食か。６普段でも餅・粽・お強がよく食卓にのぼるか。７寿司は江戸前か関西風か。８さつま揚げも天麩羅というか。９おにぎりは三角形か俵形か丸形か。10「きつね」と「たぬき」の中身。11醤油は薄口か濃口か。12「わたしの茶碗」「わたしの箸」という習慣が残っているか。

（３）習俗文化圏：13山の神の信仰があるか。14月見の信仰があるか。

（４）方言文化圏：15打ち消し形はナイかンか。16「人がいる」はイルかオルかアルか。17ご飯をタク／ニルか大根をタク／ニルか。18アカイを「明るい」の意味で使うか。

（５）身体文化圏：19親指を立てるとどんな意味になるか。20小指を立てるとどんな意味になるか。21①膝をそろえず畳に座る、②膝をそろえて畳に座る、③椅子に腰かける・座る、④足を組んで座ることを何というか。22他人の家を訪ねたときに、玄関でどのような声をかけるか。23「怠け者」「不用者」を表す方言があるか。

3　第１次調査の結果

自然文化圏のミズナラと照葉樹林については、写真をみせながらブナ・椎・樫・楠などの説明をしたうえで被調査者に有無を判断してもらったので、岩手・山形・福島・新潟・栃木・群馬・埼玉・茨城・千葉・東京・神奈川・広島の各県でミズナラが回答され（図１）、佐々木孝明(1993)のミズナラ文化圏の一部が若年層でも確認された。被調査者を増やせば、北海道・青森・秋田を始め富山・長野以西でもミズナラ帯が見られるはずである。

図１　江戸前寿司の分布

図２　おにぎり三角形

食文化圏では、岩手県花巻市を除いて調査対象全域で「正月に餅を食べる習慣」のあることが回答された。雑煮は「角餅」「澄まし汁」が優勢であったが、雑煮の中身は多種にわたった。儀礼食としての芋は縄文式以来の伝統とされてきたが、雑煮に芋を入れる習慣は群馬県高崎市・太田市、埼玉県の行田市・さいたま市・入間市・秩父郡、千葉県柏市、東京都文京区・杉並区など広範におよぶ。とくに秋田県湯沢市、岩手県花巻市、埼玉県比企郡・秩父郡・入間市・越谷市、東京都新宿区（父母の出身地は無回答）では儀礼食としての里芋の習慣が残っているという。

江戸前寿司は北海道・秋田・岩手・宮城・山形・福島・新潟・群馬・栃木・茨城。埼玉・東京・千葉・神奈川・山梨・長野のほか岡山・佐賀・長崎・熊本の話者が回答した（図１）。また、天麩羅は「ころも揚げの天麩羅」のみを指すのが東日本の伝統とされてきたが、今回の調査では秋田県湯沢市、新潟県南魚沼市、群馬県高崎市、埼玉県さいたま市・西浦和、東京都久留米市・杉並区（父は福島県、母は新潟県出身）、千葉県柏市および神奈川県（父は兵庫県、母は愛知県出身）の被調査者が「さつま揚げも天麩羅をいう」と回答した。長崎県大村市・長崎市出身の２名は天麩羅は「ころも揚げの天麩羅」のみと答えた。

おにぎりの形は、三角形の勢力が東北南部と関東地方で安定した勢力を保っているほか岡山・佐賀・長崎・熊本の話者からも回答があった（図２）。俵型は埼玉県入間市の１件のみ。丸形は秋田県湯沢市、岩手県花巻市、新潟県南魚沼市、埼玉県比企郡、東京都文京区、長崎県大村市で散見された。

食べ物としての「きつね」と「たぬき」は、東日本では「きつね」は油揚げをのせた蕎麦(そば)・饂飩(うどん)、「たぬき」は天カスの入った蕎麦・饂飩、西日本では「きつね」

は油揚げをのせた饂飩、「たぬき」は油揚げをのせた蕎麦、というのが定番であるが、秋田県湯沢市、岩手県花巻市、群馬県太田市、埼玉県秩父郡・鴻巣市、神奈川県で西日本型が現れた。両親の出身地はいずれも東日本なので、西日本からのゆるやかな伝播であろう。

醤油も、東日本で濃口醤油（大豆と小麦をほぼ等量に使う）、西日本で薄口醤油（大豆に小麦または米を使う）が古くからの老年層の分布であったが、群馬県高崎市、埼玉県さいたま市、茨城県（父埼玉県、母佐賀県）、神奈川県（父兵庫県、母愛知県）で薄口醤油を使っているという回答があった。徐々に食文化圏の境界線が崩れつつあるようだ。

次に、「私の茶碗」「私の箸」という朝鮮文化の伝統が根強く継承されており、北海道から長野県・神奈川県にいたるすべての調査地域（青森県のみ未調査）および岡山・熊本・沖縄から回答があったが、埼玉県入間市・行田市・川口市・さいたま市、東京都練馬区、新潟県南魚沼市、長崎県大村市ではこの伝統がみられない被調査者（いずれも両親は東日本出身）も一部観察された。

習俗文化の山の神信仰は宮城県仙台市、長崎県大村市、埼玉県さいたま市で伝統が確認された。また、８月15日の十五夜信仰は、北海道虻田郡、宮城県仙台市、埼玉県さいたま市・入間市・戸田市で残っていた。両親の影響も大きいに違いない。

方言文化の一つとしての打ち消し形で西日本型の「ン」を使う若年層が秋田県湯沢市、新潟県十日町、千葉県柏市、東京都東久留米市および長崎県長崎市で見られた。TVその他のメディアによる「飛び地」の例といえる。

存在表現に「イル」を使う言語習慣は今日でも東日本で安定している。今回の調査でも「オル」を使うのは千葉県柏市の被調査者1名のみだった。

「ご飯を炊く」「大根を煮る」は、「ご飯をタク」「大根をニル」が東日本での伝統的な方言形であるが、ご飯も大根もニルという古形を用いるのが３名（埼玉県西浦和など）、ご飯も大根もタクという関西型の方言形を使う若者が１名（埼玉県入間市）いた。

アカイを「明るい」の意味で使うのも古くからの用法である。これが埼玉県東松山市・入間市の被調査者から回答があった。

「怠け者」「不用者」を表す方言では、ノラが山形県米沢市および新潟県南魚沼市で、ダラが新潟県十日町市で、フヨーモンが埼玉県入間市で、ナマケモンが埼玉県さいたま市の被調査者から得られた。また、「放蕩者」を表す方言は、山形県米沢市・新潟県十日町市・埼玉県入間市・埼玉県さいたま市の若年層から得られた。

他人の家を訪ねたときの玄関での掛け声の分布に関しては、目立った特徴は見られなかった。

身体文化としての「親指を立てる」の意味を「親父」とする者が埼玉県越谷市ほか26名。関東地方がほとんどである。「男」の意味とするのが宮城県仙台市ほか29名。その他の意味で使用する者が４名であった。両親の影響は軽微と考えられる。

「小指を立てる」の分布を図３に示す。[子供][彼女][俺の女]の意味で使うと回答した

図３　小指を立てる

のが群馬県・埼玉県・東京都の被調査者。図３に見るように、「彼女」の意味とする地域が最も多いものの、親指も小指も「隠れた文化」であるから、今後も勢力圏が大きく変化することはなさそうだ。

「座る」については「①膝をそろえずに畳に座る」「②膝をそろえて正座する」「③椅子に腰を下ろす」「④足を組んで畳に座る」動作を表す方言形を求めたところ、

A　①／②／③／④型：①～④をすべて別々の方言形で表現する完全分割型の認知構造。

B　①／②③／④型：②③を同一方言形のスワル、①をネマル、④をアシクムかアグラカクで表現する型。

C　①③／②／④型：①と③をスワル、②をセイザスル、④をアシクムかアグラカクで表現する型。

D　①②/③／④型：①②がスワル、③がスワルとカケルの併用という不完全分割型なので分割記号には「／」ではなく「/」を用いた。③と④は完全分割型の認知である。

という４種の認知型が見られた。このような型の地理的分布は、従来の老年層の分布と大差ない。

４　境界線を重ねていく

今回の調査ではわずか24項目に過ぎなかったが、図４に示したように、自然文化圏（ミズナラ文化圏)、三角形のおにぎり、江戸前の寿司、ころも揚げの天麩羅、私の茶碗・箸、小指を立てる、などの調査項目で新潟県→群馬県→埼玉県→東京都→神奈川県を結ぶ文化境界線がかなり有力になった。もちろん、今後の第２次調査のデータによって大きく変わることも予想される。

図４は、上記24問のうち、分布のはっきりしていた項目に関する境界線を重ねたものである。この境界線は、今回よりもっと西寄りの地域を対象にした第2次調査が完了した時点では、石川県→岐阜県→静岡県を結ぶ線にまで西に移動し、これが東日本文化圏と西日本文化圏とを分ける大境界線になることもが予想される。

今回の第１次調査の結果から、次のことが明らかになった。

（１）自然文化の分析結果から、米文化を重く見た柳田国男の一連の指摘はきわめて貴重で示唆深いものであったが、照葉樹林の分布や坪井洋文の「餅なし正月の図」、そして今回の調査結果が物語るように、文化の調査は弥生式文化に重点をおいてはならないこ

図４　文化境界線の一部

とを示唆している。

（２）若年層の文化圏は、老年層の文化圏に比べると全国的な「文化の平準化」という傾向が強くなりつつあるのではないか

６　第２次調査へ

本年は西日本および沖縄県の若年層を対象にした調査を行い、その後に老年層を対象対象の調査に移る計画であるが、老年層の調査は、2010年調査は面接調査とWeb調査の併用を予定している。Webのトップページは図５のようなものになる（今回のWebページの作成は共同研究者の松永公廣先生（摂南大学大学院）にご担当いただいた）。

なお、本稿は2010年10月23日情報文化学会第６回近畿支部研究会でのレジュメに手を加えたものである。

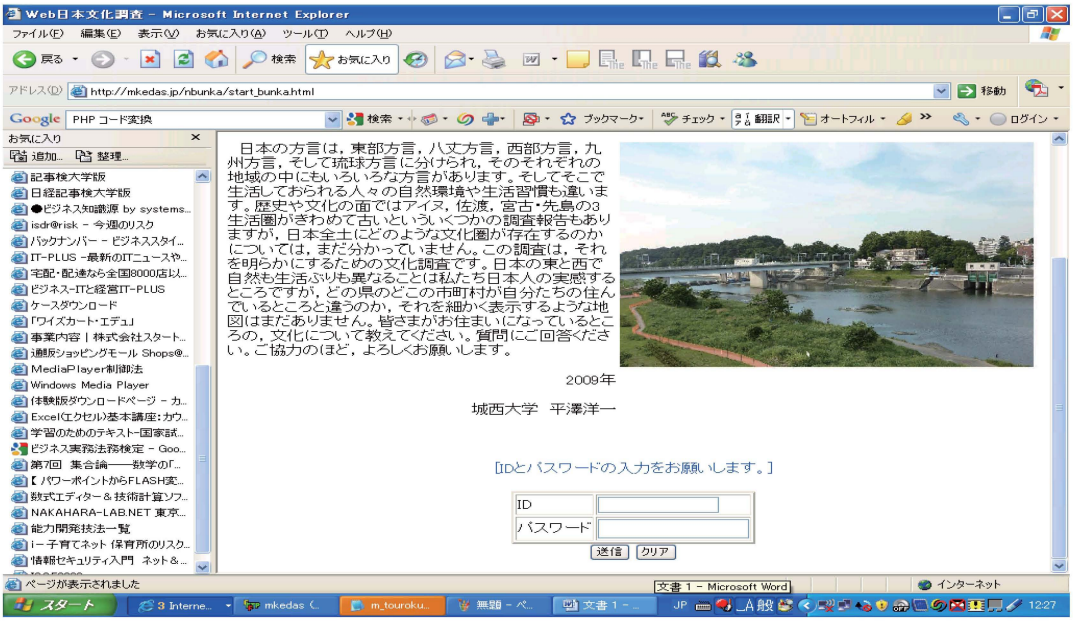

図５　現代文化圏を調査するWeb画面

注

(1) 平澤洋一(2010)「日本文化の基層と境界線」(『広島大学留学生センター紀要』第8号、73-82頁、広島大学留学生センター)。

(2) 平澤洋一・西田純也・松永公廣(2008)「日本文化の東西境界線」(第5回情報コミュニケーション学会、於明治大学)。

(3) 先行研究および本研究の現在までの資料によれば、日本文化圏の基層を断定することができないので、「ミズナラ帯文化圏」「焼畑農業文化圏」「餅なし正月文化圏」「照葉樹林文化圏」と思われる地域での詳細な調査データが揃うまでは、現代文化圏から見た限りで「深層」という用語を用いることにしたい。

(4) 加藤晋平(1988)『日本人はどこから来たか』岩波書店、安本美典(1990)『新説　日本人の起源』JICC出版、 同(1991)『日本人と日本語の起源』毎日新聞社、松本秀雄(1992)『日本人は何処から来たか　血液型遺伝子から解く』日本放送出版会、佐々木孝明(1993)『日本文化の基層を探る』NHKブックス 、田中 琢・佐原 真(1993)『考古学の散歩道』岩波新書、室山敏昭(2008)『「ノラ」と「ドラ」怠け者と放蕩者の言語文化誌』和泉書院など。

(5) 上記(1)に同じ。